

No	提 案 名	提案団体名		
		代表者氏名	所 属	
8	大谷まちづくりプロジェクト	宇都宮大学 陣内研究室 まちづくりプロジェクトチーム		
		渡邊 真弓	宇都宮大学大学院教育学研究科	
			指導教官 氏 名	陣内 雄次

1 提案の要旨

これからの日本は、超少子高齢化、人口減少という他の国が経験したことがない課題に直面してく。そのような中で、これからの地域づくりには、今まで以上に地域資源に着目することが必要とされるところ。大谷地区は、大谷石という世界に誇る地域資源がありながらも、1989年の採石場陥没後、人口減少など厳しい状況におかれている。その大谷地区で、地域資源を生かした面白いまちづくりモデルがつかれるのではないかと考えている。

また、2011年3月11日の東日本大震災からの復興、まちづくり自体に対する関心・必要性はさらに高まっている。そういった中で、子どもの視点が欠落してはならないと考える。なぜならば、これからのまちの将来は子どもたちが担い、築き上げていくものである。

以上のような背景のもと、本提案では、大谷地区をフィールドとして、地域資源を生かしたまちづくり学習の提案を行う。大谷地区で「大切な人と行きたい大谷」というコンセプトのもとまちづくり学習を展開した。市内それぞれの地区で、大谷での実践モデルを参考に、子ども参画のまちづくりが進んでいくことが期待される。そのことによって、まちづくりへの意識を持つ次世代育成につながり、宇都宮市の持続可能なまちづくりへと発展していくだろう。

2 提案の目標

本提案では、大谷地区での地域資源を生かしたまちづくり学習を提案事業とする。

この取り組みが一つのモデル事業となり、市内それぞれの地区で、大谷での実践モデルを参考に、子ども参画のまちづくりが進んで、それが宇都宮市の持続可能なまちづくりへと発展していくことを最終目標とする。

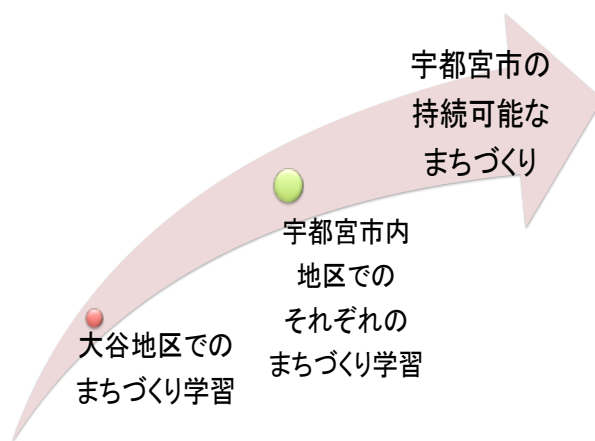


図1 本提案における目標ステップ（筆者作成）

3 現状の分析と課題

3-1. 宇都宮市大谷地区の現状

宇都宮市大谷地区とは、宇都宮市から西に約 8km に位置する町であり、この付近一帯から採掘される石を大谷石と呼んでいる。大谷石は約 2000 万年前の火山噴火により堆積した凝灰岩で、

宇都宮市大谷地区のみでしか産出されない珍しい石である。大谷地区の歴史や文化については、『大谷地区は、大谷石の盛衰とともに変化している。江戸時代には農閑期の岩切として、明治期に入ると軍都とともに大谷石も生産され、石の産地として徐々にその名を知られることになる。市街地からひと里離れた大谷は、一時期宇都宮の奥座敷としてその名を馳せたが、この地域には一種独自の風習や文化が根づいていて、歴史を紐解くと、それらの側面が見えてくる。どこか閉鎖的で、人を寄せ付けないところがある。(中略) 地元では持ち上げられないことたくさんあるが、行政や知識人、著名人が加わることで、無限の可能性が出てくる。彼らはまちおこしの意義や価値観、また歴史や文化に精通している為、余分な感情は排除され誇りを持たせてくれるのだ』¹とあるように、地域で活動している団体から地域の中に新たな目線を持つ者が入ることで、新たな価値を創造出来ることが示唆されている。

県内には蔵や壁が大谷石でできている家も多く、大谷石は暮らしの中に溶け込んでいる。しかし、この大谷石の需要量は近年では大きく低下しており、全盛期の昭和 48 年には年間 89 万トン近くあった出荷量も平成 22 年には約 2 万トンにまでに落ち込んでいる(図 2)。また、事業者、従業員数も低下の一方であることが分かる。この背景の一つとしては、建築基準法の改正、新たな建築資材の開発などで需要が低下したことなどが挙げられる。

観光地としても、その入込み人数は、1996 年から 2010 年までに、多氣山で約 20 万人、大谷寺で約 15 万人、大谷資料館、平和観音で約 9 万人の減少がみられる(図 3)。これらに対応すべく、宇都宮市や地元企業が大谷石の魅力を発信するなどして、ここ数年では大谷石の魅力が再び見直されつつある。地域資源の再認識として、一つのツールとしてまちづくりの展開が求められていると考える。

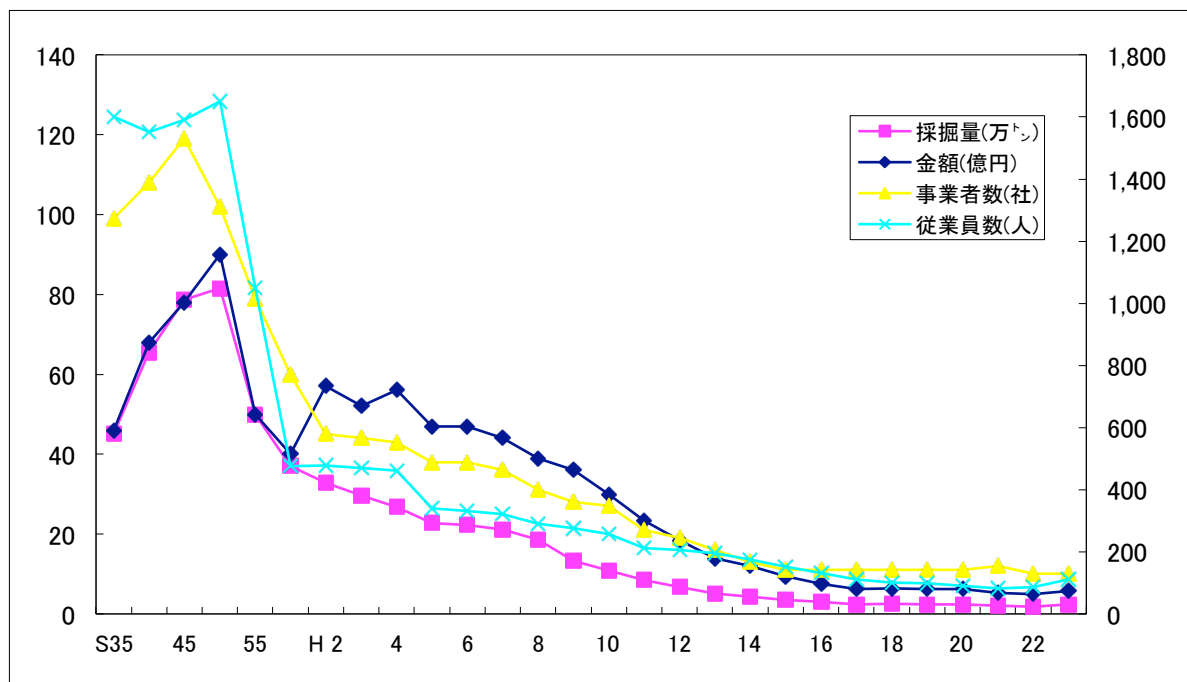


図 2 大谷石産業の推移 (出典：大谷石材協同組合)

¹ うつのみや市政研究センター『宇都宮まちづくり論集[VIII]』pp38-42 NPO 法人大谷石研究会 高橋啓子「中心市街地活性化への一考察-まちおこしから今提案できること-」2011.12

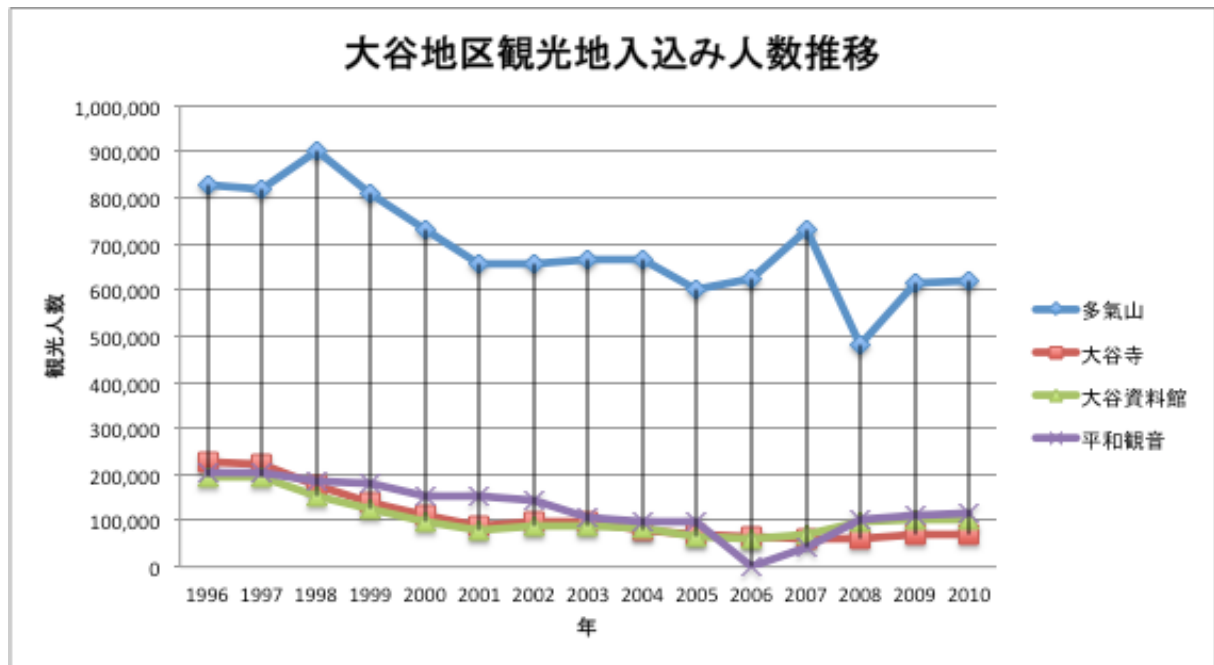


図3 大谷地区の主な観光地入込み人数推移
(宇都宮市観光交流課のデータをもとに筆者作成)

3-2 まちづくり学習について

(1) まちづくり学習とは

「まちづくり学習」といっても、その明確な定義はないといえる。「まちづくり学習」、「まち学習」、「住まい・まち学習」、「環境学習」、「地域学習」など、まちづくり学習に似た概念や街づくり学習に含まれる概念は様々あり、使う人の独自の定義、または感覚によって使い分けされているのが現状であるといえる。なぜならば、「環境」、「地域」をどこまでのスケールと捉えるかは、人によって異なる。たとえば「環境学習」とは人間と取り巻く環境全般に渡るものであり、「判断力」や「主体性」の育成を定義に含むが、日本においては公害を契機として広く認識されたことから、その範囲は狭く捉えられがちで、一般的な環境問題や自然保護に偏重していた。

『「まちづくり学習」と称されるものやそれに似た概念のものに共通していえることは、「まち」に関わる事象や事柄、もの、人などを題材とした実践的・体験的な学習形態をとるということである。実践的・体験的な学習形態とは、フィールドワーク、インタビュー調査、絵や模型作り、グループ討論、ディベートなどである』²。また、学習の具体的な目的は、実践的・体験的学習方法を通して、子どもたちが自分たちの住むまちを知ることによって、まちづくりに関わるノウハウや思考力、それを主体的に考え行動する力、話し合う力、まちへの関心や意欲、まちの形成者としての責任感の醸成といえる。つまり、まちづくり学習は、単なる知識習得に終わらず、子どもの生活の場である「まち」を題材として学ぶ楽しさや学ぶ意味、思考の手立てなど学ぶ能力の基礎を築く学習といえる。そうした基礎が発展し、課題発見・解決力、コミュニケーション力といった現代社会に必要とされる力に結びついていくと考える。

²住宅総合研究財団・住教育委員会編著『屋根のない学校』萌文社 2011

高木真理「家庭科教育におけるまちづくり学習の可能性 ―住生活領域の視点から―」宇都宮大学教育学部修士論文 2001

（２）まち学習先進地への聞き取り調査結果

2011年12月26日に、地方独立行政法人北海道立総合研究機構建築研究本部北方建築総合研究所（図4）にまち学習への取り組みに関する聞き取り調査を行った。同研究所は、1957年に前身



となる北海道立北方建築研究所が設立されて以来、半世紀にわたり、北海道の居住環境の向上を図るための先進的な取り組みを続けている。

同研究所居住科学部では、1990年の道の北方型住宅政策を受けて、「戦後から住宅の外構造は変化してきているのに対し、人の暮らし方や住まい手の意識というものは変化してきていない」ことへの問題意識を持ち、子どもたちへの住環境への意識を育てるべく、平成8年より住教育への取り組みを開始した。

図4 研究所施設内（筆者撮影）

同研究所では1996年～1998年までは、地域をフィールドに子どもたちを集めて、まち歩きや模型作りなどをレクチャーしていたが、なかなか地域での根付きが難しかった。その後、2000年度より、教育委員会や学校と共同で、住教育プログラム開発に関する研究を始めた。2001年1月に、住まいとまちの体験学習プログラム集「ただいま」を発行。これは、当時総合的な学習の時間が始まる時期であったので、その授業で展開できるような姿勢で製作した。道内の1500校に配布し、地域でも集会等を開いて普及活動を行った。翌年には、道内の中学校、高等学校にも配布を行った。しかしながら、普及は難航したため、2003年からは、教員を対象とした研修会を行っ

表1 北方建築総合研究所における子どもの住意識向上に向けた取り組みの事業実績（筆者作成）

年度	住教育 支援活動	支援 協力者	住教育 プログラム普及
1996年度～ 1998年度	小学生を対象としたまち歩き、模型作り	建築士会、短大、役場、地元企業ほか	
2000年度	小学校での授業支援	建築士会、小学校ほか	「ただいま」の発行
2001年度～ 2005年度	小学校授業支援、中・高等学校教諭対象家庭科における住分野の研修会	教育委員会、小学校、高等学校、短大、専門学校ほか	住居学習資料「住まい・まち・暮らし」作成、ペーパークラフト作成ほか
2006年度～ 2008年度	中・高等学校への授業支援、家庭科教諭対象の研修会	教育委員会、中学校、高等学校ほか	「住まいとまちの学習プログラム集2」作成、全道の中・高等学校への住教育アンケート実施
2009年度～	研修会	住まい・環境教育学会、教育委員会ほか	

ている。(表1参照)

同研究所が2007年10月に行った家庭科における住居領域学習に関するアンケート調査によると、住居領域の学習を重要と認識している教諭は90%をこしているが、実践は50%に満たない。授業者の視点を入れたプログラム集の開発を行い、全道の小中高等学校に配布しているが、その認知度と使用度は40%弱にとどまり、高くないのが現状である。つまり、実際に教材があってもなかなか授業での展開が難しいのが本当のところであった。

以上研究所聴き取り調査より、単に副読本等の教材を作成し配布するだけではなかなか実践までには行き着かず、やはり実際に門家等がレクチャーや実践に携わらないと展開の可能性が低いことがわかった。地域だけ、学校だけという、単体での住教育・まち学習の展開ではなく、いかに連携した形を取るかが課題となってくるのではないかと考える。

4 施策事業の提案

提案事業：大谷まちづくり学習「Oya マチヅクリ 大切な人と行きたい大谷」

(1) コンセプト

子どもたちが、自分たちが考える「大切な人」と行きたくなる「大谷」を考える。大切な人だったら何があれば喜んでくれるだろう、この場所を大切な人にも気に入ってもらうにはどうしたらいいのだろう・・・身近な大切な人を具体的に想像しながら、これからの大谷のまちづくりを考える。

(2) ねらい

地域資源あふれる大谷地区で、地域資源に着目したまちづくりを、大切な人と行きたくなるようなプランを子どもたちに考えてもらう。自分たちだけでなく、自分たちが大切にしている人にも一緒に来てもらえる大谷を考えることにより、地域に対する想いが強くなると考えられる。また、子どもたちが考えたプランを地域内外の大人たちに発表をし、よりよい大谷の未来を考える。

友達、家族、恋人・・・
そんな**大切な人**と
行きたくなる**大谷の景観**を
一緒に考えてくれませんか？

名前 _____

図3 Oya マチヅクリ案内チラシ(1)

（３）事業内容

本提案事業では、地域をフィールドに展開したが、今後学校教育でも展開が出来る様に、中学校での授業展開（家庭科、総合的な学習の時間など）を想定し、50分×全7回のプログラム設定を行った。

第1回目：オリエンテーション、住居についての講義（宇都宮大学教育学部陣内教授）

第2回目：まち歩き（1）、プランニング準備

第3回目：コースプランニング（1）

第4回目：ゲストスピーカー（大谷資料館館野館長）

第5回目：まち歩き（2）、コースプランニング（2）

第6回目：発表会準備

第7回目：発表会

まず、まちをつくり上げている、住まいについての基礎的な学びをしてもらい、なぜまちづくりをこれから考えていって欲しいのかなどを伝えた。その後各自大切な人を設定し、行政が発行している大谷のまちマップを参考にしながら、2人1組でポラロイドカメラを持って、まち歩きをしてもらった。自分たちが良いと感じた所、そうでないと感じた所など「大谷らしさ」を写真におさめてもらった（図6）。

その後の第3回では、前回まち歩きをした際に感じたことをもとに、大切な人と行きたくなる大谷のコースをプランニングした（図7）。第4回には、大谷に携わり、想いを抱いている大谷資料館館長館野氏をゲストスピーカーとして呼びし、資料館を開く経緯や、大谷について、今後の大谷に対する想いなど、子どもたちと近い距離で語っていただいた（図8）。

今までの情報等を整理するために、もう一度第5回でまち歩き、コースプランニングを行い、発表会に向けて準備をした。

発表会は地域の方も参加して下さり、子どもたちの発表の後ディスカッションを行う時間を設けたので、互いに意見を交換出来る場となった（図9）。

Oya マチヅクリ 大切な人と行きたい大谷

大谷地区には、大谷石という世界にただ一つだけの素敵な地域資源があります。
今、その「地域資源を活かしたこれからの大谷のまちづくり」をどうしたらいいのか悩んでいます。

そこで是非、若いみなさんの力を借りて、みなさんの視点で、今までになかったような素敵な地域資源を活かした大谷のまちづくりと一緒に考えていきたいと思っています。

若いみなさんが、大切な人と行きたくなる大谷、大切な人と過ごしたい大谷ってどんなものかを提案していただけないでしょうか？

みなさんと地域で実践したプログラムをこれからの学校教育の中、特に住居やまちを学ぶ家庭科の時間で実践出来る様にアレンジして、これからの宇都宮市の家庭科で広めていきたいと考えています。

そして、みなさんの提案を地域内外に発信していき、素敵な大谷を広めていきたいと考えています。

是非ご協力よろしくお願い致します。

図4 Oya マチヅクリ案内チラシ(2)

プログラム内容

回	日にち	概要	活動内容
1	6月16日 (土)	・オリエンテーション ・住居についての講義	・プログラムの趣旨説明、自己紹介 ・宇大教授による講義
2		・まち歩き（1） ＊雨天決行 ・プランニング準備	・ベアでガイドマップを活用し、写真を撮りながらコース巡り ・ポイントの整理
3	7月14日 (土)	・プランニング（1）	・ポイントごとにテーマに沿ったコースを考える
4		・ゲストスピーカー	・大谷に関わる属性の異なる方からのお話を伺う
5	7月28日 (土)	・まち歩き（2） ・プランニング（2）	これまでの授業を振り返り再度まち歩き、コースを考える
6		・発表準備	コースプランの発表
7	8月11日 (土)	・発表	

図5 Oya マチヅクリプログラム内容



図6 まち歩きの様子 (2012.7.28)



図7 プランニングの様子
(2012.7.14)



図8 ゲストスピーカー館野さんと共に
(2012.7.14)



図9 発表会の様子(2012.8.11)

（４）事業の効果

今回、大谷まちづくりの一つのツールとして、まちづくり学習を取り上げ、プログラム展開を行った。子どもたちはそれぞれ大切な人を「家族」、「友達」、「恋人」と３つのグループに分かれて、「家族の絆を深める大谷」、「体を使って思いっきり楽しむ大谷」、「ゆっくり楽しむ大谷」というコンセプトのもとコースプランを作り発表した。参画した子どもたちからは、「大谷の良い所をたくさん知ることができた」、「地域の人にも知ってもらえて楽しかった」などが挙がり、発表会に参加して下さった地域の方からは、「子どもの視点だからこそその提案が多く刺激になった」、「子どもが大谷のことを考えてくれて嬉しい」という声が聞こえた。

この取り組みの強みとして、子どもという未来を担う人材は、いつの時代でも存在しているということである。大人になっていけば、地域から出ていってしまうかもしれないが、その育つ過程でまちづくりに触れることで、自分たちの住む地域を捉えられる人材となるのではないだろうか。以上より、このまちづくり学習の効果は次世代を担う事業としての効果は大きいと考えられる。

５ 今後の可能性

今回この事業を行って感じたことは、地域単独、学校単独では、まちづくり学習の展開、子どもを入れたまちづくりは難しいということだ。行政、時に民間からの協力体制がなければ広がり、持続性がある展開にはなっていない。そこで、行政としてどのような協力をしていただけるとよいかをまとめてみた。

まず、大谷まちづくり学習からの発展として、地域と学校での協力体制。そこにおいて、大きな窓口になってもらいたいのが、教育委員会、子ども未来課、文化課、みんなのまちづくり課、生涯学習課である。また、子どもたちが実際に計画したものが、どのような生かされ方があるのかを都市計画課でフィードバックしていただければと思う。また、そうしたまちづくり学習から生まれたアイデアを産業という面からも捉えていただいて、産業政策課や商工振興課などでも協力体制を組んでいただければと思う。また、学習を行った子どもたち自身が観光アドバイザーとなり。子どもたちの視点で観光ができる仕組みも組み込めるとさらに面白い繋がりができると考える（図 10）。

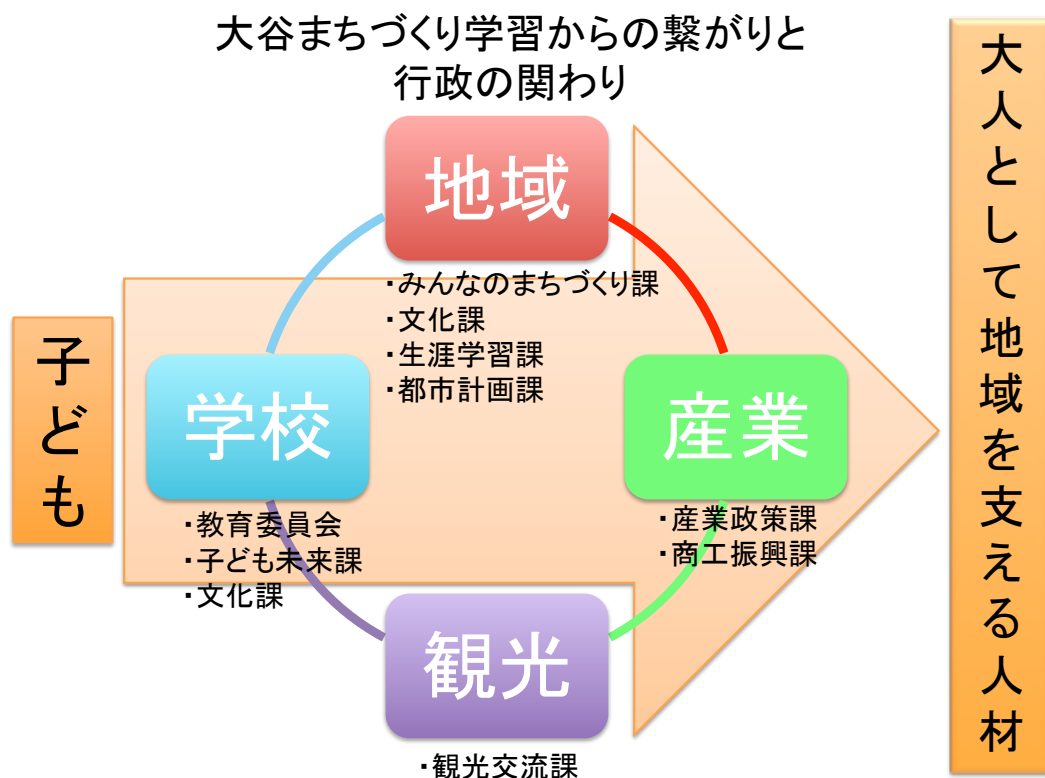


図 10 大谷まちづくり学習からの繋がり行政の関わり（筆者作成）

今回は、宇都宮市大谷地区でまちづくり学習の展開を行ったが、どの地域にも地域資源はあふれ、まちづくり・地域づくりに対する問題を抱えている。この大谷での取り組みが一つのモデル事業となればよいと思う。市内それぞれの地区で、大谷での実践モデルを参考に、子ども参画のまちづくりが進んでいくことが期待される。そのことによって、まちづくりへの意識を持つ次世代育成につながるものであり、それが宇都宮市の持続可能なまちづくりへと発展していくのではないだろうか。

子どもたちの柔軟で自由な発想を持っている。そうした子どもたちが地域に関わることで、地域にも子どもたち自身の中にも新たなものが生まれる。また、私たちのような大学生、行政、地域内外の大人という、属性の異なる人々が交わることで新たな化学変化が起きると思う。

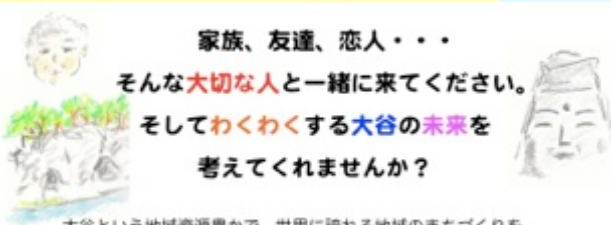
地域内外の方に取り組みを知ってもらいたく、また是非取り組みへのフィードバックの場を設けたく、2012年11月18日に今回のまちづくり学習、また同大学工学部で大谷を研究フィールドとしている研究室とともにイベントを行う予定である（図11）。

Oya

まちづくり★イベント

2012.11.18(sun)

10:00~12:00



家族、友達、恋人・・・
そんな大切な人と一緒に来てください。
そしてわくわくする大谷の未来を
考えてくれませんか？

大谷という地域資源豊かで、世界に誇れる地域のまちづくりを、今までにない視点で、子どもたちと学生が一生懸命考えてきました。それをみなさんの前で発表します。多くの方に聞いてもらい、一緒に素敵な未来を描きたいと思っています。力を貸してください！！

主催 渡邊真弓 (WATANABE Mayumi) と仲間たち

宇都宮大学大学院 教育学研究科
 家政教育専修2年
 陸内 (住環境・まちづくり) 研究室
 Tel : 080-1069-4897

現在宇都宮大学で「子どもまちづくり」を研究しております。何かございましたら、お気軽にご連絡ください。

協力 宇都宮大学工学部清水研究室／宇都宮未来クラブ(UFC)／Heaven's Joy／学生カフェ KANMAS／駄菓子屋あめんぼろ／株式会社アトム／城山地区市民センター

大切な人と考える大谷の未来



子どもたちが考える「家族、友達、恋人と行きたい大谷」とは？面白アイデアがたくさん♪




イベント内容

1. オープニング×ゴスペル×大谷
2. ガイダンス
3. 発表会×学生cafe×大谷
 ☆「大切な人と行きたい大谷」発表 (宇都宮未来クラブ(UFC))
 ☆大谷石採取場跡地の可能性について (宇大工学部 清水研究室)
 -----ちょっと一息のゴスペルを聴きながら-----
4. 参加型トークディスカッション
 「大切な人と考える大谷の未来」コーディネーター：陸内雄次 (宇都宮大学教育学部教授)
5. クロージング
6. 景観公園にて大谷カルタ取り大会！



子どもたちが、大谷の魅力を「大谷カルタ」にしました！見に来てください♡



カフェアースで温かい飲み物とお菓子を販売いたします。駄菓子屋もあります。ぜひにきてください☆

駐車場は市営駐車場をご利用ください。会場までは徒歩5分です。

会場案内図



*雨天時は城山地区市民センター1階ホール

図11 大谷まちづくりイベントのチラシ（筆者作成）